

Cure to Care 第 1 話

與儀 達朗

【登場人物】第1話

町田 翼（32）（17）：救急医

鈴木 舞（32）（26）：訪問看護師

村井 正和（50）：訪問診療所院長

金城 恵（36）：訪問診療所職員

鈴木 健（52）：外科部長

八木 直久（50）：救命センター部長

新井 亮（29）：町田の後輩の救急医

高井 玲奈（30）：救命センター看護師

* 台詞名は新井に似ているため、玲奈表記

田中 徳次郎（85）：肺がん末期患者

田中 慶子（50）：徳次郎の長女

田中 良子（45）：徳次郎の次女

町田 亜由美（40）（55）：町田の母親

山田 （29）：町田の後輩の救急医

島崎 （30）：町田の後輩の救急医

救急隊員（22）：救急隊員

高齢患者（95）：救急搬送患者

キャスト1（40）：TVキャスト1

訪問診療医（50）：TVのコメンテーター

覚知（50）：居酒屋の店主

森田（50）（35）：舞の当時の受け持ち

患者

新人看護師（22）：救命救急センター所属

医師A：救命救急センター研修医

看護師A：集中治療室所属

医師B：集中治療室研修医

外科医A：外科部長鈴木の部下

外科医B：外科部長鈴木の部下

幼児（2）：森田の一人娘

ケン（50）：前田救命センター救急医

【あらすじ】第一話

救命救急センターで勤務する救急医の町田翼は後輩と共に、救急搬送されてくる高齢者の対応に明け暮れていた。いわゆる医療難民に加え、かかりつけも含めて急変時の治療コードが定まっていない患者が多く、町田や後輩の心身はすり減っていった。

ある日、外科部長主治医の肺がん末期の患者が呼吸不全で搬送されてくる。町田は苦渋の決断で人工呼吸器を患者に装着するが、救命のために施した処置に対して、患者の長女からは厳しい言葉をかけられ、鈴木からは救急医のエゴではないかと疑われる。心が折れてしまった町田は救命センター部長から休暇を勧められる。

休暇中、町田は鈴木舞と出会う。舞は、『医療が患者の人生を決める世界が当たり前前だったと思うけど、今度は彼らの人生で医療

を決めてみない？』と訪問診療所の連絡先を町田へ渡すのであった。町田は、過去の記憶も思い出しながら、村井診療所の見学に赴く。

第1話 「出会い」

○幹線道路（夜）

一台の救急車が走っている。

○救急車内

救急隊員らが心肺蘇生を行っている。

町田 N 「高齢化社会が加速する日本。202

5年には団塊世代が後期高齢者となり、救急搬送は増え続けている。救急搬送の受け手である救急医の負担も同様である」

○前田救命センター・ステーション（夜）

デスクの上の電話が鳴る。少し荒げに

受話器を取る新井亮（29）

新井 「はい、前田救命センター」

救急隊員の声 「95男性、そちらの呼吸器内

科にかかりつけの患者です。呼吸苦の

訴えがあります。受け入れ可能でしょ

うか？」

新井「ちょっと待ってください」

新井は患者情報をボードに書いて、電話機の保留ボタンを押す。周囲を見渡す新井。医療スタッフが忙しそうに働いている。町田翼（32）が白衣を羽織りながら素早く新井の横に現れて、患者情報の書かれているボードを見る。

町田「新井、うちのかかりつけだろ？」

新井「まあそうですけど……」

新井は受話器を耳にあてる。

新井「受け入れます、名前と生年月日お願いします——」

新井が電話で救急隊とやりとりを続けている。

○同・初療室（夜）

新井「ここら辺の夜間の救急病院がうちくらいしかないのは分かりますけど……。高齢者の搬送が多すぎませんか？」

腕を組んでいる新井。

町田「最近本当に増えているよな」

新井「かかりつけがなくていざ具合悪くなつてから救急車呼ぶとか、かかりつけ含めて治療コードの話を全くしたことがないとか……本当多すぎますよ」

T「治療コード…急変の際にどこまで治療をするかという取り決め。たとえば心肺停止の時に心臓マッサージを行うか、行わないかといった治療の選択肢を決めること」

新井「こんなのがこれからもずっと続いているなら、僕らの心身もちませんよ」

ため息をつく新井。

○同・初療室（夜）

救急隊員が患者である高齢患者（95）を連れて初療室のベッドに移しかえる。新人看護師（22）が血圧計を巻いて、測定を始める。高井玲奈（30）が新

井と町田のほうを見る。

玲奈「先生、うちのかかりつけみたいだけど治療コードって決まっているの？」

新井、パソコンでカルテをチェックするが、コードの記載は見当たらない。患者に酸素マスクを取り付けている町田が新井に声をかける。

町田「どう？」

新井「コードの話し合いの形跡ないです……」

新井がうんざりした顔をする。

玲奈「え、フルコードってこと？」

T「フルコード…急変の際にありとあらゆる救命処置をすること」

新人看護師「フルコードだとどうなるんですか？」

新井「急変の時に、人工呼吸器や心臓マッサージなどの体に負担がかかる、ありとあらゆる処置を行う。人によってはいわゆる延命処置だよ」

新人看護師「そんな……」

一瞬静まり返る初療室。落ち着いた口調で町田が口を開く。

町田「人工呼吸器が今必要な状況ではないでしよ。幸い酸素投与で落ち着きそう。新井、C T室の手配しておいて」

新井は町田の方を見て頷き、患者移動の準備を始める。呼吸状態が落ち着いてきた患者がそばにいる町田の右手を掴む。

高齢患者「人工呼吸器とか言ったけど、頼むからやめてくれ。亡くなった妻が繋がれて亡くなったのをみて辛かった……頼む」

町田は患者の掴んだ手を優しく剥がして手を握る。

町田「すいません、不安にさせて。今はこの酸素マスクがあれば大丈夫ですから」

玲奈「町田先生、C T室の準備できました」
町田「ありがとう。移動頼む」

医者Aと新人看護師が患者を連れていく。町田は下を向き、患者が握っている。

た右手を見つめている。

○前田救命救急センター・医師控室（朝）

寝落ちしそうな表情で椅子に座り、電子カルテを仕上げている新井。新井の頬に冷えた缶コーヒーをあてる町田。

新井「冷たい！　ありがとうございます」

新井が町田を見て軽く会釈する。

町田「新井も徹夜？」

新井「そうですね……」

町田がふと、ホワイトボードに書かれてある入院患者のリストを見る。75歳以上の高齢者が8割以上となっている。新井が町田の視線に気づく。

新井「相変わらず高齢者の救急搬送と入院が多いですよ。日頃から通院して健康管理してれば防げたかもしれない」

町田「まあ、蓋を開けてみると、独居で身寄りがなかったり、体に不自由を抱えていて通院がなかなかむずかしい人たちも増えて

きたよな」

新井「医療難民ってやつですよね？」

T「医療難民…適切なタイミングで医療を受けることが難しい状態にある人」

町田「そうだな」

左手に付けているミサガを見つめて

いる町田。

新井「どうかしました？」

町田「いや、なんでもない」

(回想はじめ 一週間前)

T「一週間前」

○同・救命センター部長室

八木直久(50)が椅子に座っており、
机を挟んで町田が立っている。

八木「町田、話があるって？」

町田「部長、半ば愚痴になるかも知れませんが、救急搬送患者の大半が、かかりつけがないとか、治療コードが決まってない高齢

者たちです。治療コードなんて、うちのかかりつけでさえ決まっていなくて、中には癌末期の患者もいます」

八木「まあ、かかりつけ問題については医師会とか周囲のクリニックとの連携を強化している最中なんだ。治療コードについては、昔からうちの内科や外科にも投げかけている問題なんだけどな……」

町田「そのうち僕らの救命処置で望まない人生を送る患者が出ると思うと、正直辛いです。自分が仮に主治医だったら、何かできなかもしれないって……」

町田の話は八木は黙って聞いている。

八木「そういえば町田、専門医取って数年なるけど、この後進みたい道とかあるのか？」

町田「まだ次のステップはまだ決まっていなくて」

スクラブのポケットに入っていた院内ピッチが鳴り、電話に出る町田。八木に軽く会釈して、部長室を出ていく。

（回想終わり）

○商店街・大通り

町田が商店街を歩いている。店の前のベンチに田中徳次郎（85）が腰掛けていている。

町田「田中さん、お久しぶりです」

田中「おお、町田先生。ちょっと待っててな」
重い足取りで店の奥に行く田中。暫くして右手にお茶と菓子をもって現れる。

○商店街・店前ベンチ

町田と田中がベンチに横並びで座っている。町田がもらったお茶を飲んでい

町田「田中さん、最近見ないと思っていたんです」

咳込む田中。

田中「ちょっと入院しててな」

町田「大丈夫なんですか？」

田中「大丈夫よ。あれからどれくらいかな？」

町田「2年くらいですかね」

田中「あの時はひどい肺炎を起こして、先生に人工呼吸器つけて助けてもらったな。

先生は命の恩人だよ」

町田「いえいえ」

田中「あの時影があるからって行って外科の先生紹介してくれたよな？」

町田「たしか……癌だったんですよね？」

田中「そう。今は外科の鈴木先生に診てもらっているけど、調子悪くて時々入院してる。

どうやら癌が全身に転移しているみたい」

町田「大変ですね……」

田中「正直、体もしんどくてね、もう入院もこりごりだよ。昔みたいには頑張れない」

町田を見て苦笑いの田中。

○前田救命救急センター・ステーション（夜）

ナースステーションに集まっている医

師 A、看護師 A、新井、玲奈の 4 人。
電子カルテを前に何やら不安げな表情
の 4 人。そこに町田が歩いてやって
くる。

町田「どうした？」

新井「さっき受け入れ要請があつて、85 歳
男性の患者なんですけど。酸素投与で
は保てなさそうな呼吸状態なんです」

玲奈「この患者さん、外科部長の鈴木先生の
患者で、ステージ 4 の肺がん末期なんです
けど、治療コードの話し合いがされてなさ
そうで……」

町田が救急隊からの情報が書かれたボ
ードの用紙を見る。患者名に田中徳次
郎と書かれている。

町田「新井、ハイフローと挿管の準備頼む。
高井さん、レントゲンと CT いつでも取れ
る様に手配お願いします」

新井「肺ガン末期の患者を人工呼吸器に繋げ

るんですか？」

町田 「治療方針は俺が家族と話すよ。でも流石に人工呼吸器には繋がらないと思っている」

○同・初療室（夜）

救急隊が田中徳次郎（85）を運んでくる。初療室のベッドに移される田中。かなりの頻呼吸で顔にはびっしょり汗をかいており、苦しくて会話ができない様子だ。新人看護師が血圧測定や酸素飽和度の測定を行う。

玲奈 「先生、リザーバー15Lで酸素飽和度80%しかありません」

新井 「ハイフロー装着しましょう」

町田 「家族は？」

玲奈 「次女さんが来ています」

○同・面談室（夜）

町田と田中の次女である田中良子（4

5）が机を挟んで向かい合って座って

いる。

町田「救急医の町田といいます」

良子「徳次郎の次女の良子です。先生、父は助かるんですか？」

町田「いま懸命に治療しています。何かお父様の体のことで聞いていますか？」

良子「長女が病院に連れてついているんですけど、肺がんで全身に転移しているって……。でも主治医の先生からはここ最近は安定しているって……」

町田「お父様はおっしゃる通り肺がんで全身にもガンが転移しています。一見安定していそうでもぎりぎりの状態で生活されていますたかもしれません」

町田「このような形で急に具合が悪くなった際の治療について話し合ったことはありますか？たとえば人工呼吸器の話とか？」

良子「長女からはなにも聞いてません……」

町田「長女様はいまどちらに？」

良子「出張中でさっき連絡したら朝一で戻っ

てくるって」

町田「少し長女様と連絡取ってみていいですか？電話番号教えてください」

良子「はい、こちらです」

町田はスマホの画面に表示された長女の電話番号をみて、院内ピッチから電話をかけるが応答しない。町田の表情が曇る。

面談室のドアが開き、新井が現れる。

新井「町田先生、ちょっと」

町田「すいません、一旦失礼します」

軽く良子に頭を下げ面談室を出る町田。

そのまま面談室のドアを閉めて新井の顔をみる。

町田「どうした？」

新井「ハイフローでも呼吸不全が進行しています。このままだともたないですよ。救命のためには人工呼吸のサポートが必要だと思います、でも……」

町田「……ちょっと待ってて」

再度面談室のドアを開け、中に入る町

田。軽く息を吸う。

町田「良子さん、落ち着いて聞いてください。

お父様の呼吸状態はいまかなり悪くて命が危険な状態です。救命のためには人工呼吸器のサポートが必要な状況です」

町田「ただお父様の肺や全身状態からは一度人工呼吸器を装着してしまうと、残りの人生お口から管を入れられたまま一生を終えてしまう可能性が高い。そのような人生の結末をお父様は望んではないのではないのでしょうか？」

(フラッシュ)

田中「正直、体もしんどくてね、もう入院もこりごりだよ。昔みたいには頑張れない」

良子「そんなの……いきなり言われてもわか

んないです。お父さん助けてください、先生」

町田「お父様の今後のお姿を考えると人工呼吸はおすすめできません。呼吸苦を緩和する治療も――」

俯き気味だった良子がパッと顔をあげ

鋭い表情で町田の言葉を遮る。

良子「先生は父を見捨てるのですか？」

町田「そうは言っていないません」

良子「だったら助けてください、先生は救急医なんですよ、お願いしますよ！」

町田に向かって泣きながら頭を何回も

下げる良子。なんとも言えない表情で

面談室の壁を見つめている町田。

○同・初療室（夜）

軽く俯きながら足取り重く入ってくる

町田。

新井「先輩？」

町田「新井……人工呼吸器につなげる」

一同驚いた表情で町田をみる。数秒間の沈黙が流れる。

玲奈「患者さん肺がん末期じゃないんですか？」

町田「そうだよ……」

新井「いわゆる延命処置ってことですか、先輩？」

町田「家族と話し合って救命を優先することになった、フルコードだ」

○同・集中治療室（朝）

人工呼吸器に繋がれた徳次郎。首や手には点滴の管がつながっている。

玲奈がモニターをチェックしている。酸素飽和度のアラームが鳴る。突如モニターの心拍数が徐々に落ちていく。気づいた玲奈が慌てて徳次郎の首に手を触れる。脈が触れない。

玲奈「ドクターコールお願い、心停止！」

玲奈が患者の心臓マッサージを始める。

医師 B (26)、看護師 B (23)、
が駆けつける。看護師 B が玲奈と心臓
マッサージを変わる。変わった直後に
新井と町田が勢いよく入ってくる。

町田「どうした？」

玲奈「1分前に心停止」

新井「初期波形は？」

玲奈「P E A」

町田「わかった。俺は気道側に回って指揮を
取る。新井、原因検索を頼む。高井さん
アドレナリン 1 A i v して」
懸命に蘇生が続けられている。看護師
B と医師 B が心臓マッサージを交代し
て続けている。壁の時計の針が十分経
過する。

町田「新井どうだ？」

新井「採血では原因特定できなさそうです。
ただ直前に酸素飽和度が下がるイベントが
あって……これ見てください」

新井が患者の胸にエコーをあてて心

臓を描出する。町田の顔がこわばる。

町田「・・・肺塞栓？」

新井「心停止原因だとしたら……」

町田「厳しいな……」

顔を見合わせる町田、新井。玲奈がカーテンを開けて入ってくる。

玲奈「家族来てるわ」

町田「入れてくれ……」

玲奈に案内されて長女の慶子（50）

と次女の良子が入ってくる。

彼女らの目の前には複数の管に繋がれた徳次郎、懸命に心臓マッサージを行っている医療従事者の光景が広がっている。町田がゆっくりと近づく。

町田「懸命な蘇生処置をしていますが……」

慶子「もうやめてください！」

悲痛な叫びが蘇生メンバーの手を止める。彼らは驚いた表情で慶子を凝視している。

慶子「どうして父はこんな姿になっているん

ですか？ 町田先生どうして父にこんな苦しい思いをさせているんです？」

良子「先生は命を助けてー」

顔に怒りを浮かべている慶子。

慶子「命を救うため？ こんなに管に繋がれて父が最後を迎えるなんて……もういいです」

慶子は足早に父親のベッドの横に駆け寄り、膝から崩れ落ちて泣いている。

呆然と立ち尽くしている町田。

新井がおそるおそる声をかける。

新井「先輩？」

町田は、ベッドの横にいる慶子と良子に軽く頭を下げ、カーテンを開けて病室から無言で出る。

○同・医師控室（朝）

椅子に腰掛け、下をむいて座っている町田。目の前に、紙コップに入っているコーヒーが置かれる。顔を上げる町

田。机の上に座っている新井。

町田「ありがとう」

新井「先輩、全然悪くないですよ。後からああいう言い方するなんて家族も卑怯ですよ。そもそもあんなギリギリで生きていた患者に治療コードを詰めない外科が――」

町田「新井」

新井の言葉を目で制する町田。町田の視線の先には、黒いスクラブの上から白衣を着ている外科部長の鈴木健（52）が立っている。緑の手術着姿の外科医A（36）とB（34）が部長の後ろに立っている。

町田「鈴木先生」

鈴木「町田先生、僕の患者が世話になったみたいだね。結果は残念だったけど、懸命に蘇生してくれたとか」

軽く会釈する町田。

町田「力及ばず申し訳ないです。患者の引き継ぎがあるので失礼します、新井」

新井に目で合図して、新井と共に控室から出ようとする町田。

鈴木「長女さんに会ったよ。次女と話して人工呼吸器をつけたんだって？私も驚いたけどね。まさか救急医の先生のエゴではないよね？」

町田の右手が震え、握っていた紙コップがグシャグシャに潰れる。目の奥に怒りを灯しながら鈴木の目を見る町田。

町田「お言葉ですが……先生たち主治医がそのような患者の治療コードを事前にお話になっていないから、今回のような問題が生じるのではないのですか？」

新井「先輩……」

新井が町田の左手を掴むが、町田は振り払う。黙って聞いている鈴木。

町田「僕ら救急医は先生たちの尻拭いではありません。失礼します」

出ていく町田。外科医らに軽く会釈して町田の後ろを追う新井。

○町田自宅・外観（朝）

静寂の中で小鳥のさえずりが響いている。

○町田自宅・居間（昼）

買い込んだ缶ビールやスナック菓子が袋いっぱい居間の机に置かれている。数個の空き缶が机の上に散らばっている。

○前田救命救急センター・ステーション（昼）

新井がステーションの机の前に座ってパソコンを操作している。右横の椅子に腰掛ける山田（29）。新井の肩を叩く山田。

山田「久しぶり、新井」

新井「お、山田じゃん、院外研修どうだった？」

山田「うちと違って迷わず蘇生みたいな救急

患者が多かったからな。勉強になったよ」

新井「うらやましいなあ」

山田「確かにうちは、ギリギリの患者が治療方向性が決まってなくて、受ける俺らも本当大変だよな」

新井「だよな」

勤務予定表が貼られているボードをみている島崎（30）。勤務予定表の中で誰かを探しているが、見つからない様子。

島崎「ねえ、町田先生は？ シフト表に名前がないんだけど」

山田「そいえば、たしかに！」

パソコンのキーボードを打つ新井の手が一瞬止まる。

新井「一週間休暇だった」

島崎「え、あの仕事大好き町田先生が？」

新井「部長に聞いたたら、有給溜まりすぎて管理職が怒られるから、しぶしぶ取らせただけ」

新井「俺、ちょっと休憩行ってくる」

席を立ち、そそくさと去ろうとする新井。顔を見合わせる山田と島崎。

○同・医師控室（昼）

三人が紙コップのコーヒーを片手にソファ―に座っている。

山田「……そんなことがあったんだ」

新井「まあ休暇と関係あるかは知らないけど」

島崎「まあ町田先生は初対面の患者でストレスかかるような面談も数多く自分でやってきたからね」

山田「責任感強いですよね」

新井が頭を掻きむしる。

新井「でもその面談も主治医が本来やっておくべきで、町田先輩がやらなくてもよかったです……」

山田「僕らの前では、ほんと頼りがいがあった目標の救急医の先輩だったけど、色々溜まっていたのかな……」

医師控室の電話が鳴る。島崎が受話器をとる。

島崎「患者くるって」

山田「新井、いこう」

新井「おう」

○町田自宅・居間（夕方）

自宅でベッドの上で横になりながらスマホをいじりながら、画面を見ている町田。そこにラインの着信音と共に、画面の上部に新井からのメッセージが表示される。

新井（声）「先輩、お疲れ様です。山田と島崎も久々に帰ってきたんで、飲み会しましょう。先輩の可愛い後輩達ですよ！明日、十九時、空けておいてください！」

文面を見て鼻で笑う町田。

町田「新井……」

町田がスマホで返信を返す。

○町田自宅・居間（夕方）

着替えている町田。クローゼットの扉を開けると、扉が隣の棚にあたる。衝撃で棚から一枚の色紙が落ちてくる。ふと落ちてきた色紙に目をやるが、大学サークル時代のものだとわかると、気を止めず、すぐに棚に直す。

○居酒屋・団体席（夜）

盛り上がっている室内に入るため、暖簾をくぐる町田。中では新井、島崎、医師A、新人看護師が盛り上がっている。

新井「先輩、おそいっすよー」

島崎「町田先輩、どうぞ」

ビールの生ジョッキを渡される町田。

町田「あれ山田は？」

島崎「今日は急遽当直してます。町田先輩によろしくって言っていました」

新井「休暇中の町田先生に乾杯！」

一同乾杯の声をあげる。

少し場の陽気な雰囲気戸惑いながらも、ビールを一気に飲み干す町田。

○同・カウンター席（夜）

町田が一人カウンターに座っている。

目の前に焼酎の瓶が置いてある。

一人、粛々と焼酎の水割りを飲む町田。

○同・団体席（夜）

酔った新井が高井に絡んでいる。

それを横目に見ている島崎。

新井「高井さん、ほんときれいですよね。い

やー彼氏とかいないんですか？」

玲奈「いない」

淡々とお酒を飲んでいる高井。

新井「えー、僕と付き合ってくださいよお」

軽くボディタッチを凶ろうとする新井。

新井の手を、島崎が叩く。

島崎「新井、あんた今の時代、三回は訴えられてるから！」

新井の顔を指さす島崎。

新井「なんだよ、厳しい世の中だな」

面白くなさそうな表情で席を立つ新井。

○同・カウンター席（夜）

新井がカウンターに座っている町田を見つ
つけ、町田の左隣に座る。

新井「せんぱーい、お疲れ様っす。相変わらず酒強いっすね。今日は飲みましょ」

酔って呂律が回っていない新井。

町田「新井、飲み過ぎだよ」

新井「全然、酔ってないです。俺の先輩いなくて寂しいです。戻ってきてくださいね」

町田に抱きつこうとする町田の右隣に、

新井の頭を叩きながら、颯爽ときて座る

島崎。

島崎「先輩目標にしている後輩は多いんですからね。戻ってきてまた一緒に働いて、

色々と教えて欲しいです」

町田「ありがとう」

彼らの言葉を受けて表情が少し緩んで
いる町田。団体席へ戻っていく新井と
島崎。

○同・玄関（夜）

扉が開いたことを知らせる鈴の音。

鈴木舞（30）が立っている。居酒屋

店主の覚知（50）が舞に声をかける。

覚知「いらっしやい！」

舞「まだやっていますか？ 今日はやけに賑

やかですね」

覚知「舞ちゃん久しぶりだね」

町田の左隣のカウンターに一つ空けて

座る舞。

舞「生ビールもらえますか？」

覚知「はいよ、お待ち」

覚知が、舞の前にビールを置く。

出されたビールを飲み始める舞。

覚知「仕事忙しいのかい？」

舞がビールのジョッキを机の上に置く。

舞「そうですね。訪問看護の仕事は呼びだしも結構あるから……今日は久々の休みなんです」

覚知「頑張っているんだね」

訪問や看護という言葉が少しばかり気になって聞き耳を立てる町田。

舞「でも、患者さんの生活に深く関わられるから私は好きかな」

覚知「舞ちゃん、次も生でいい？」

舞が頷く。舞が飲んだ空のジョッキを覚知に渡そうとして誤って、右方向へ倒してしまふ。ジョッキの中の氷が、町田の方向に転がっていてしまふ。少し驚いた町田は思わず、席を立ち上がる。

覚知「すいません、お客さん」

町田「大丈夫です」

舞「すいません、自分も手が滑ってしまっ

思わず目があう町田と舞。

お互いの顔を数秒見つめている。

舞「町田先生？」

町田「鈴木？」

舞が口を開こうとした瞬間、そこへ新

井が現れ、町田に肩を組む。

新井「先輩、二次会カラオケです」

思わず横にいる舞を見る。

新井「めちゃくちゃ美人じゃないですか、先

輩の知り合いですか？」

町田「……」

舞「大学のサークルの同期です」

新井「まじっすかぁ。最高じゃないですか。

お名前は？」

舞「舞です」

新井に戸惑いはじめる舞。

町田「新井、これで会計して先に二次会いけ」

新井「りょうかいです、先輩今度、合コン

作ってくださいね」

新井が小声で町田の耳元でささやく。

新井をはじめ、飲み会のメンバーは店の外へ出ていく。静寂を取り戻しつつある店内。

舞「町田先生、私の卒業式以来よね？」

町田「ああ、サークルの追いコンだったけ？

懐かしいね」

舞「町田先生、今どこで働いているの？」

町田が自身の飲んでいるグラスを飲み

干し、机に置き一呼吸置く。

町田「前田救命センターで救急医をしている」

舞「三次の救命センターじゃん、すごいじゃ

ん、私のお父さんもその病院で働いている。

偶然だね」

町田「お父さんって、鈴木健先生？」

舞「そう」

思わず噎せる町田。

町田「あ、お父さん最近なんか言っていた？」

舞「特に何も言っていなかったけど、どうかし

た？」

○同・カウンター席（夜）

何やら町田が舞に対して話している様子。
子。

舞「へえ、そんなことあったんだ……」

町田「そうなんよ」

舞「気にしないで。患者と向き合って治療コ

ードを決めていないお父さんが悪いと思う」

ジョッキを机に置く舞。

町田「そうなんだ。鈴木はどうして訪問看護

師になろうと思ったの？」

舞「元は外科病棟で看護師してて、私の受け

持ちに森田さんって患者がいたの」

舞は残っているビールを飲み干す。

舞「店長、もう一杯生もらえますか？」

覚知「舞ちゃん、飲み過ぎなんじゃない？」

舞「大丈夫」

舞の前に新しい生ビールジョッキが置

かれる。それを手に取る舞。

舞「森田さんは当時、ステージⅣの膵臓癌で

入退院を繰り返していた。化学療法も長い

ことやってたけど、自分の体が徐々に限界に近づいていることが分かっていたのよね」
黙って聞いている町田。

（回想はじめ 4年前）

○外科病棟（昼）

ナースコールが鳴る。かけつける当時

の鈴木舞（26）

舞「どうしました、森田さん？」

ベッド上の森田が、身をかがめてベッ

ドの下にあるものを取ろうとしている。

森田「ほんと、舞ちゃんすまんね」

舞「あんま無理しないでくださいね」

舞は自らがんで、ベッド下にある一

枚の写真を見つける。

舞「これですか？」

森田「そうそう」

拾った写真を森田に手渡す。一枚の写

真には、若い頃のコック姿の森田（3

5)と幼児(2)が一緒に写っている。

森田「俺の一人娘なんだ」

舞「森田さん、娘さんいたんですね」

森田「若い頃の料理人の俺はさっぱりダメでね。食べねえってかみさんが、娘を実家に連れて帰ってもう15年近くか」

森田「来週頭には娘が成人式かなんかで、こっちに帰ってくるらしい」

舞が神妙に話を聞いている。

森田「一生懸命治療してくれているが、主治医には、俺の体はいつどうなってもおかしくないって言われてな……」

森田「だったらまだ手足が動くうちに、帰ってくる娘に、せめて家で手料理くらい作ってやりたいんだよ」

写真見て軽く笑う森田。

(回想終わり)

○居酒屋・カウンター席(夜)

町田「それで森田さんはどうなったの？」

舞「森田さんの願いは結局叶わなかった。主治医の先生から、自宅療養は急変リスクがあるし、少しでも長く生きたいのなら入院続けて今の治療を続けるべきだって強く言われてね」

舞「それからしばらくして森田さんは亡くなったわ」

町田「そうなんだ……」

舞「それから私は、患者の人生をもっと大切にしたいと思ったの。だから今は訪問看護をしている」

町田「患者の人生を考える……か」

舞「先生は救急医で初めての患者を相手にすることが多いと思うけど、患者と接してきた主治医はちゃんと彼らの人生と向き合うべきだと思う」

町田「確かに向き合えば治療コードも自然と決まってきそうだね……でも現実はできていない」

町田は、ため息をつく。

○居酒屋・玄関前（夜）

外に出た覚知が、玄関に掛かっている
『営業中』の札を裏返し、『支度中』
に変えて、店の中に戻る。

○同・カウンター席（夜）

舞「町田先生は、この先何かやりたいこと決ま
まっているの？」

町田「部長にも言ったけど、正直まだ決まっ
てはないんだよね……」

舞「訪問診療とか興味ある？」

町田「訪問診療？」

舞「色々な事情で病院の外来に通えない人の
生活の場に伺って主治医として医療を提供
したり、相談の窓口になったりする。彼ら
の生活の中で医療がサポートをするイメー
ジかな」

町田「何で俺に？」

舞「自分が主治医だったら治療コード含めて、

何かできることがあるはずって顔に見えたけど……」

ハツとした表情を浮かべる町田。

舞「医療が患者の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、今度は彼らの人生で医療を決めてみない？」

舞がカバンの中から一枚の名刺を出して、町田の座る机の上に置く。

名刺には、『村井訪問診療所』と書かれており、連絡先が載っている。

町田「村井訪問診療所？」

町田は、渡された名刺に目をやる。

○居酒屋・玄関前（夜）

目の前に止まっているタクシーの後部座席の扉が開き、乗り込む舞。
タクシーを見送る町田。

○商店街・アーケード出口（夜）

町田はスマホの画面を見ながらアーケ

1ドの出口を出て住宅街に入る。左から颯爽と小走りに走ってくる金城 恵（36）。町田とぶつかり、よろける金城。金城がかかえていた袋から物品が散らばる

町田「すいません！ 大丈夫ですか？」

金城「ごめんなさい、そちらこそ大丈夫ですか？」

町田「大丈夫です」

金城は、袋から散らばっている物品を集めて袋に戻し、再度小走りで去っていく。町田はプラスチックのネームプレートが落ちているのに気づく。『村井訪問診療所 アシスタント（看護師）金城恵』と書かれている。何かに気づいた町田がスポンのポケットから舞に渡された名刺を出す。

○住宅街・通り（昼）

時折スマホを見ながら歩いている町田。

目の前に古いプレハブが建っている。

『村井訪問診療所』と書いてある立

札。村の表記だけが新しい感じがする

が、気に留めず玄関へ向かう町田。

○村井訪問診療所・玄関前（昼）

玄関の前にある呼び鈴を鳴らす町

田。

金城（声）「はい、村井訪問診療所です」

町田「すいません、落とし物届けにきました、

町田と言います」

玄関の扉が開く。町田の前に金城が立

っている。

町田「すいません、昨日夜に拾ったんですけ

ど……」

ポケットからネームプレートを出し、

金城に見せる町田。

金城「ああ、無くなってたから探してたの。

ありがとう。町田さん、昨日もしかしてー

ー」

町田が金城を見て軽く頷く。

金城「ごめんね、昨日急いでいて」

町田「いえいえ」

舞「金城さん、頼んでいた点滴ってあと何箱
でしたっけ？」

点滴類が入った段ボールを抱えて玄関
に姿をみせる舞。

舞の姿に思わず目をやる町田。

舞「町田先生じゃん、来たんだ」

町田「おう……」

町田は奥にいる舞を見る。

金城「無くしたネームプレート、届けに来て
くれたの。舞ちゃんの知り合い？」

舞「大学の時のサークル同期で、今は前田救
命センターの救急医なんです」

○村井訪問診療所・応接室（昼）

ソファーに座っている町田。金城が机
の上にお茶とお菓子を置く。

金城「ごめんね、こんなものしかないけど」

町田「いえいえ。すいませんわざわざ……」

金城「救急医って忙しくて大変よね。今日はお休み？」

町田「今、休暇中……」

金城「わざわざ休暇中に本当にごめんね」

町田「気にしないでください」

町田が診療所の内観を見渡す。壁に飾っているいくつもの患者からの感謝の手紙が目に残る。

金城「うちの医療は生活の場でできることから、病院みたいに大掛かりな手術や処置はできないけど、意外かもしれないけど患者からは感謝されるのよね」

黙って聞いている町田。

点滴の入った段ボールを運んでいる舞。

舞「町田先生も、いろいろあるみたいだし、一度、訪問診療の見学してもらったらどうですか？」

金城「いろいろあるの？」

町田が以後の発言を遮るような鋭い視

線で舞の方を見る。

町田「鈴木」

舞「ごめん、つい……」

金城「大歓迎だと思おうよ」

町田「せっかくの申し出で嬉しいのですが」

「」

舞「いいじゃない。先生今週いっぱい休暇だ
けど予定ないって言っていたし——」

町田が再度、鋭い視線で舞の発言を遮
る。

舞「あ、ごめん」

町田「休みとはいえ、勉強しないとイケない
ことも多いんで。僕はこれで失礼します。

ご馳走様でした」

軽く会釈して玄関の扉を開けて出てい
く町田。

○町田宅・居間（夕）

つけっぱなしだったTVから流れてく
る音声に気づく町田。

○テレビ局 スタジオ（夕）

キャスター（40）と訪問診療医（50）
が話をしている。

キャスター「2025年の問題もはじめ、日本の高齢化社会が加速していますがこの先の日本の医療の行末を、訪問診療医の先生はどう考えていますか？」

訪問診療医「病院やクリニックにおける外来の需要・供給バランスも考慮すると、医療難民がさらに増え、医療の場が自宅や施設になっていく患者さんが増えていくでしょうね」

（回想はじめ 十五年前）

T「十五年前」

○町田実家・居間（朝）

町田（17）が大学受験の参考書を抱えながら姿を見せる。在宅酸素の機械

を付けている町田亜由美（40）が、
食事の片付けをしている。咳き込む亜
由美。

町田「最近調子悪いんじゃ…病院行った方
がいいんじゃない？」

亜由美「これくらい大丈夫。外来行くのだっ
て大変なのよ。というか翼、模試でし
よ、今日？」

町田「そうだけど…体気をつけてよ」

亜由美「自分の心配しなさい。早く一人前の
医者になってお母さん助けてね。これお守
り」

亜由美は、玄関先に立つ町田の手にミ
サングを握らせる。

町田「いらないよ。こんなのいきなり付けた
ら笑われるよ」

恥ずかしそうな表情を見せる町田は
ミサングを机の上に置く。

亜由美「せっかく作ったのに」

町田「行ってくる」

亜由美「いってらっしゃい」

亜由美が笑顔で町田を見送る。

○学校前・夕

町田のポケットに入れている携帯に着

信が鳴る。電話を取る町田。

○前田救命センター・集中治療室

人工呼吸器を付けた亜由美がベッドで

寝ている。医療スタッフがケアをして

いる。ケン（50）が町田をベッドサ

イドに案内する。

ケン「呼吸不全で、心臓が止まる寸前だっ

たよ。なんとか今は落ち着いている」

町田「そうだったんですね……ありがとうございますご

ざいます」

ケン「お母さんが肺の難病を患っていること

は？」

町田がうなづく。

ケン「ちょっとした風邪をこじらせると一気

に肺が悪くなるんだけど、この経過だとし
ばらく我慢していたのかもしれないな。」

町田「多分俺に氣遣って、無理をしていたん
だと思います」

ケンがポケットからミサンガを取り出
して町田に見せる。

ケン「搬送中に握りしめて、息子さんの名前
を呼んでいたそうだ」

町田がミサンガを手に取り、涙を浮かべ
る。

ケン「お母さんの体では外来通うのも負担に
なるし、せめて早めに抗生物質を処方でき
る環境があればな……」

町田「母はどのくらいで良くなるんですか？」

ケン「肺の持病もあるからまだわからないけ
ど……まずは呼吸器が外れるかだな」

町田「繋がったままってことですか？」

ケン「治療始めたばかりだから、今は回復を
祈るしかないよ……母ちゃんのそばについ
てあげな」

(回想終わり)

○伊祖療養病院・病室

町田がスピーチカニューレを装着して
いる亜由美(55)と話している。横
には人工呼吸器が置かれている。

亜由美「仕事は頑張っている？」

町田「まあまあかな、母さんも元気？」

亜由美がうなづく。亜由美がボードに
書いている。

亜由美「表情がさえないよ、大丈夫？」

町田「大丈夫だよ、心配しないで」

呼吸がやや荒くなってくる亜由美。

町田は呼吸器をカニューレに繋げる。

亜由美がホワイトボードに何か書いて
いる。

亜由美「(ずっとしゃべれないのは辛いね)」

町田「そうだね……でも母さんは意識もあつ
て呼吸器を外せる時間もあるからまだ良い

方なのかもね……」

亜由美がうなづく。

町田「また来るよ」

○伊祖療養病院・玄関

町田が病院の玄関を出る。

○伊祖療養病院前・歩道

町田が歩いていると、前から高井が歩いてくる。

町田「高井さん」

玲奈「町田先生」

町田「家この辺でしたっけ？」

玲奈「親戚の家に用事があった……失礼します」

軽く会釈してその場を去る高井。

○村井訪問診療所・玄関前（朝）

玄関前に立つ町田。右手で呼び鈴を鳴らす。玄関が開く。村井正和（50）

が立っている。

町田 「はじめまして、診療見学に来た町田と申します。」

村井 「院長の村井です。話は聞いています、どうぞ」

町田が診療所に入り、ドアが閉まる。

（第二話 「決意」に続く）